

～ あれから7年、東日本の今 ～

津波被災地の気仙沼市、浪江町請戸地区を訪ねて

4月20日（金）、21日（土）東日本の津波被災地を訪ねました。事前に吉村昭の「海の壁 三陸沿岸大津波」を読んで参加しましたが、現地に足を運び、眼にし、聞いたものは、想像を絶するものでした。

4月20日

気仙沼市すがとよ酒店 菅原文子さん

一昨年12月17日に元あった鹿折の地に酒店を再建した「すがとよ酒店」の菅原文子さんを訪ね、お店の2階の交流スペースで、津波被災時の写真や動画などを見せていただきながら、貴重な体験談を聞かせていただきました。



震災前の店舗です。気仙沼の鹿折で酒屋を営んで90余年、地元密着で酒屋を続けてきました。

あの3月11日、予想をはるかに超える津波が店を襲い、2階に避難していた祖父母が亡くなり、夫の豊和さんも文子さんが必死に手を伸ばしたが、その手をすり抜けて津波に流され、行方不明になりました。



津波の「すがとよ酒店」周辺の風景



自宅の物干し台で赤いタオルを掲げた年配の女性がすがるように手を振り助けを求めている。2011年3月12日午前8時38分ごろ 宮城県気仙沼市（手を振っているのは菅原文子さん）



週刊新潮 2011年3月31日号

店は全壊、町は瓦礫に埋まりました。行方不明の夫を探すあてもない日々が続くなか「生きていくためには」と店を再開する決意をしました。



そんな時、全壊し瓦礫とヘドロで埋まった店の中を掘り返すと、商品が一部流されずに残っていました。あの時、夫が最後まで店を守ろうとシャッターを閉じていたため、流されずに残った酒達でした。水道もままならない時期だったので必死に沢水で泥を洗い流しました。



たくさんの方たちの力添えをいただき、震災から1ヶ月と12日後の4月23日に13坪の借地にテントとプレハブで「太田店」として再出発。店先にその酒達を並べると「流されずに残った縁起のいい酒だ」と喜んで手に取って下さいました。

当時まだ近所に店らしい店がなかった時期でしたのでたくさんのお客様に来店いただきました。そしてまた、離れ離れになったご近所さんや商店街の仲間にも再会することができ、うれしくて涙が出ました。

そして、震災後支援していた方の勧めで、京都の紙司柿本商事が企画した「恋文大賞」に応募、9千通の中からもなんと大賞をいただきました。恋文は文子さんが夫の豊和さんに宛てた手紙です。

あなたへ

ひぐらしがうるさい位鳴いています。

きょうは八月二十一日、お盆を過ぎて街は静かになりました。あなたが突然いなくなって五ヶ月と十日。もう五ヶ月、まだ五ヶ月ととても複雑です。あの日、忘れようにも忘れられない東日本大震災が起きました。

あなたは迎えに行った私と手を取り合った瞬間、凄まじい勢いで波にのまれ、私の目の前から消えました。あなたはいつ体何処へ行ってしまったのでしょうか。

季節の巡りは早く、まもなく涼風が吹いて秋がやってきます。願わくは寒くなる前に、雪の季節が来る前にお帰りください。何としても帰ってきてください。

家族みんなで待っています。わたしはいつものようにお店で待っています。ただただひたすらあなたのお帰り待っています

平成23年8月21日 菅原文子

菅原豊和様へ

この手紙を書きあげた翌年の6月5日、夫の豊和さんは自宅の酒屋から数分の解体中の市営アパートの瓦礫の下で発見され、ようやく夫に「お帰りなさい」を言うことができました。



店は町の状況に合わせて引っ越しを繰り返し、平成25年6月1日に「魚町店」をオープン。長年住み慣れた町は津波でなくなってしまいました。あの日々を取り戻すため元の店のあった鹿折に戻ることを第一目標に営業することを誓いました。



そして2016年12月17日に現在の酒店をオープン！悲願であった「鹿折に戻る」という目標を達成することができました。

震災から5年と9ヶ月。「もうここでは無理だ」と絶望した時もありましたが、たくさんの人たちに支えられながらここまで来ることができました。

語り部タクシー 小野寺晟一郎さん



奥さんのこと。迎えに行かねばと夢中で車を走りださせました。

「チリ地震に次いでまたこんな経験をするとは...」気仙沼でタクシードライバーをしながら震災語り部として活動している小野寺晟一郎さんのタクシーで気仙沼の津波被災地を案内していただきながら、貴重な体験談を聞かせていただきました。

私は生まれも育ちも気仙沼。大震災で姿を変えても、やっぱり生まれ育った町が一番です。

大震災が起こったその時、私は JR 気仙沼駅前まで停車して客待ちをしていました。地震発生と同時に車の外に出ましたが、車内にすぐ戻り、ラジオのスイッチを入れると津波警報が流れました。第一に考えたのは商港方面の水産加工場で働く



小野寺さんが加えた手書きの生々しい説明が入った地図をもとにお話を伺いました。

走行中はさまざまなことを考えました。このままでは迎えに行けたとしても、帰りは津波の到来をかわすには間に合わないだろうと思い、奥さんの携帯電話をかけると通じました。奥さんは会社の車で逃げると言うので少し安心すると、今度は自宅のことが心配になり、山間部の基幹農道が

ら南へ車を走らせました。

途中、階上中学校の前で真っ白い波が水平線より高く、しぶきを上げ、押し寄せてくる様を見ました。津波警報を聞いた当初は波がこんなに高いところまでくるなど、想像もしていませんでした。

自宅に着き、夜に停電した場合を考え、息子さんに足元を片付けておくよう伝えて家を出ると、自宅前 80mまでのところまで波が迫っていました。

再び市内に戻る間も、奥さんのことが心配でした。ラジオやタクシー無線からは、想像を絶する被害の情報が流れてきます。奥さんたちが居た会社から気仙沼中学校に向かう道は大変な渋滞で、犠牲者も多く出ている状況を知り、最悪の事態を考えながら携帯を再度コールすると応答がありました。会社の運転手さんがとっさの判断で別のルートを通り、渋滞に合わずに避難できたとのこと。その機転に感謝しました。

気仙沼中学校に登る道は乗用車でも交差できない道幅なので、あれが避難道路として道幅が取れていれば多くの人が助かったのでは…。犠牲者の数が多かったのは、天災だけが原因とは思えません。当地方の海から山に向かう道路は全て道幅が狭く、それも被害を大きくした一因ではないかと考えてしまうのです。

漁業と観光の気仙沼に

コンクリートの防潮堤はいらない！！



海と生きる気仙沼市はコンクリートの要塞の中では暮らせません。亙理のグリーンベルトプロジェクトや南相馬のがれきの山に 3 万本の木を植えるなどを真似たいと多くの市民は願っています。気仙沼湾に浮かぶ大島を高い堤防で囲ってしまったら、子や孫やひ孫に残るのは、傷んでいく高い防潮堤、高齢者と大金だけです。

防潮堤建設の前に避難道を早急に整備することを願います。避難道を早期に計画しないと周辺に家屋が建ってしまい、後で移転しなければならないような事態を招きかねません。こまめに避難道、避難歩道を作り、他の地域から来ても一目で避難道と分かるように標識も整備すれば迷わず避難ができ、渋滞も防げるのではないのでしょうか。

浪江町請戸小学校の奇跡

ボランティアガイド村松孝一さん



ボランティアガイドの村松さんは JR 磐越西線で車掌をしていましたが、定年退職して後は大好きな山登りをして過ごそうと嬉々としている時に東日本大震災に遭遇し、気が付いたらボランティアガイドをやっていたという方です。福島第一原発 20Km 圏内を案内しながら、被災状況について熱く語っていただきました。

請戸小学校は海岸から約 340m、そして福島第一原発から約 5.5Km の場所にありました。

海に面する場所にあったため、もろに津波に襲われた訳ですが、先生と生徒が一丸となって学校から約 2Km 離れた高台の大平山（標高 48m）に逃げ、全員が一命をとりとめることができました。

さてこの出来事です、何が奇跡かというと、実は避難場所の高台に誘導したのは先生ではなく、生徒たちだったのです。もちろん、先生はその高台が安全であることを普段から知っていて、先生の誘導で生徒たちは向いましたが、その途中、高台に至る通常ルートに津波が迫って行く手を阻まれました。一行が途方に暮れる中、その高台でよく遊びまわっていた生徒が「僕が案内する」と言っって山道を案内し、間一発のところまで全員が高台に登ることができ、事なきを得ました。

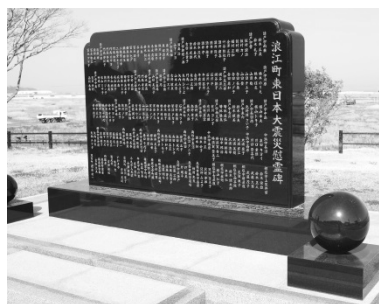
その後 1 時間ほど山道を歩いて国道 6 号線に抜け、生徒を道路脇の広場で休ませていると運よく大型トラックが通りかかり、荷台に生徒や先生を乗せて町役場まで送ってくれました。

町の体育館で迎えた翌朝、福島第一原発から 10Km 圏外への避難指示が出ました。大混乱の中、みんな県内外に散り散りになり、先生と生徒全員の無事を確認し終えたのは 4 月下旬でした。

子どもが外で元気に遊んでいたからこそ道が開け、一方先生にもその子に運命を託す勇気があったからこそ、素晴らしい結果に繋がったのだと言えます。



津波到来の午後 3 時 38 分で止まった請戸小学校の避難棟の左三角柱上部の時計



請戸小学校周辺の今の様子

高台に作られた浪江町津波犠牲者の慰霊碑

私たちが車で請戸小学校から慰霊碑のある高台に来て、立ち去るまで、パトカーに執拗に尾行され、何か不気味でした。

文責 外山孝司

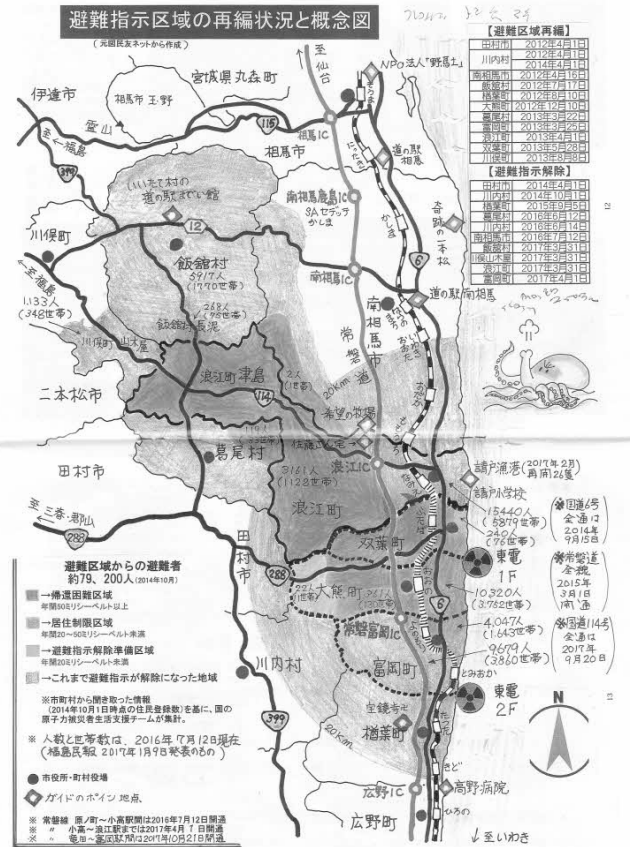
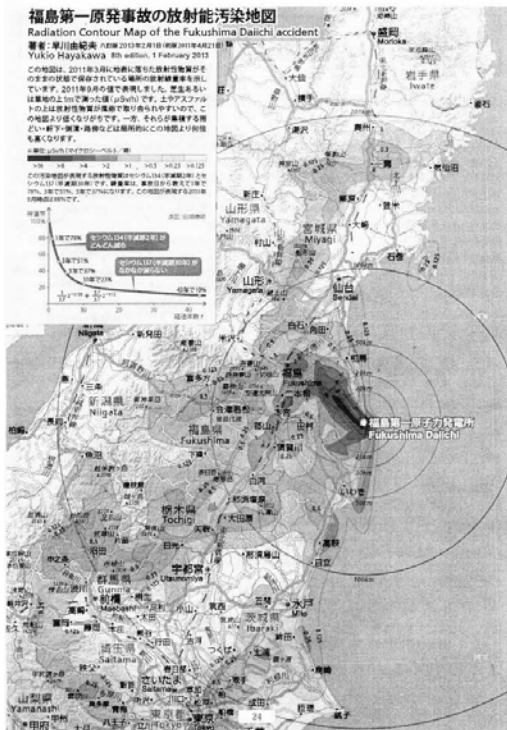
7年間、時間が止まったままの地域

Can 東日本の今を訪ねるツアー2 日目。初日の気仙沼から再び北上山地を横断、一関から東北自動車道を一気に南下。宮城県を縦断して福島県に入る。驚いた、一気に季節が進んだのだ。初日の岩手県では、桜の開花に驚き、灰色の木々に季節が初春に戻ったことを感じた。そして今度は一気に初夏だ。木々は緑に満ちている。まず今日案内してくれるボランティアの村松さんとおちあう。彼は自らハンドルを握り丸一日、原発事故20km圏内を案内してくれた。本報告はその時、感じたこと、考えたことだ。2回に渡ってお届けする。

(文・写真 Can レポーター 大村昌宏)

「緑に満ちた」汚染地域

汚染地域の第一の感想は、緑に満ちた地域ということだ。原発事故さえなければ、どんなに自然豊かな地域なのだろう。放射能汚染は、同心円で広がったのではない。事故発生、そして水素爆発で飛散した放射性物質は、風の流れによって北西方面に飛散した。



そして(↑図)これが、帰還困難区域と避難指示解除区域等の図。村松さんからいただいた手書きの地図だ。この地域を南北に貫通しているのが常磐道と国道6号線。帰還困難区域を通過する際には、「窓を開けるな」「停車するな」の指示だ。国は、JR常磐線も復旧し貫通させようとしていた。国は、汚染がひどく、帰宅困難と自ら指定している地域を貫通している公共交通機関をどんどん開通させている。

上図は、放射能汚染の様子を示す。緑豊かな農地と山林に放射性物質は巻き散らされた。

怒れる牧場主、300頭の放射能汚染牛と共に

最初に伺ったのは「希望牧場」。南相馬市と浪江町の境にある。避難指示が解除になった地域だ。緑豊かな丘陵地帯に牧場は広がっていた。草を咬む牛たち。牧歌的な風景だ。しかしこの牛たち、放射能に汚染されているからと国から殺処分をせよとされている放射能汚染牛なのだ。



牧場主の吉沢さんは「牛飼い」として殺すのは忍びないと「牛達が死ぬまで面倒をみる」と言っていた。その数 300 頭。餌代だけで年間 1 千万円かかるそうだが、国内外のカンパで賄っているとのことだ。



皮膚に白い斑点が出始めた牛。「被ばくのせいではないか」と国に調査を依頼したが、国には因果関係を調査する姿勢は一切ないようだ。次の写真は、怒れる牛飼い吉沢さん。積み上げられているのは牛の髒骨。



吉沢さんは、宣伝カーを作り、政府、東電への抗議活動を行っている。



避難指示解除になったが、帰れない

次に避難指示解除区域となった佐藤さんのお宅を訪れた。佐藤さんは生業裁判の原告の一人。無人となっているお宅に事前に許可を得て入った。



敷地内の除染が終わり線量は下がっていることになっている。(年間 20 ミシーベルト未満)
一歩家の中に入ると時間が止まっていた。洗濯物は干したままであり、家財道具が散乱していた。



避難命令が出て無人となっていた家には、イノシシが出入りし、布団をねぐらにしていたようだ。家の隣の林に一步踏み入れて線量を計ってみる。敷地内と比べて一気に数値が跳ね上がる。敷地内は除染された、家の周辺の山林は手つかずのままだ。



これでは避難命令が解除されても自宅に戻れない。除染によって住宅地の線量は下がっても周辺の林はそのままで。除染で下がったといっても 20 ミシーベルト未満が基準。日本国では公衆の年間被曝量は基準 1 ミシーベルト以下としている。福島ではその 20 倍の被ばくを許容せよと住民に迫っていることになる。しかも周辺の林の線量はさらに高い。こんな汚染地域に「帰還せよ」と日本国政府は言っているのだ。

除染によって作られた膨大な汚染廃棄物

避難解除区域に入ってまず目についたのが灰色の塀で囲まれた放射性汚染物質の仮置き場だ。平地のいたる所に存在する。「除染」とは、放射性物質で汚染された表土、草木をはぎ取り、代わりに

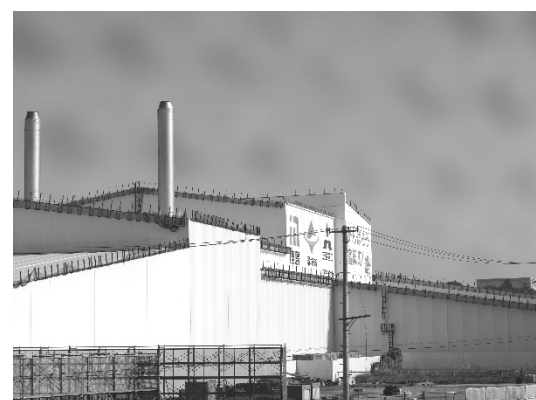
山土をひきつめて線量を低くする作業だ。そこで出るのが放射性廃棄物だ。この量が半端ではない。



両側が仮置き場。



この放射性廃棄物をどうするか。燃やして減容する。除染された土には、草木も混じっているからこれを焼却施設で燃やし量を減らす。焼却施設のフィルターは大丈夫だろうか。焼却しても放射性物質は化学反応では無くならない。焼却灰に放射性物質は濃縮され、ますます取り扱いが大変な廃棄物になる。



浪江町役場の隣にある「まち・なみ・まるし

え」で昼食。残念ながら名物の浪江焼きそばのお店はお休みだった。役場前の案内板の前で記念撮影。一番左側が案内してくれた村松さん。元国鉄・JR職員の方。「原発事故で大きく人生が変わりました」と村松さん。



避難指示が解除となった浪江町の住宅街。帰還されたお宅は疎ら。帰還しているのは「お役人のお宅」と村松さん。実際、住民数1万人の地域で帰還者は5百人単位に止まっているという。確かに洗濯物が干してある家はポツリポツリであり、車道にはほとんど車が走っていなかった。



窓を開けるな、停車するな

～ 帰宅困難区域を南下

国道6号線を南下して双葉町、富岡町の帰還困難区域を通過する。事故のあった福島第一原発より1.5kmの西側を通過。異様な風景だ、この区間、国道6号線は、直進のみ、十字路と交差点はすべて通行止めのフェンス。道沿いの外食の店、販売店の駐車場入り口にも全てフェンスで進入できないようになっている。駐車場にはペンペン草がはえ7年間の経過を物語る。信号機のある交

差点は全て点滅信号。関係車両の出入りする交差点にはガードマンが立っており、出入り車両を厳しくチェックしていた。



林立するクレーンのある方向が事故を起こした福島第一原発。



今回は、津波被害と原発事故。そして常磐線についてお伝えする。

～ あれから7年 東日本の今 ～

合同会社みさき未来を訪ねました

川口幸男



4月22日(日)合同会社みさき未来を訪問し、代表者の三浦草平さん(31歳)に案内していただき、新地町の農場を見学させていただきました。みさき未来の社員は三浦さん家族3人と地元の若者の雇員3人の計6人。南相馬市小高区井田川地区で両親と共に営農していましたが、東日本大震災に伴う地津被害と原発事故で一時、県外へ避難を余儀なくされましたが、三浦さんは「生まれ育った福島での農業をあきらめたくない」との思いから新地町で営農を再開すると同時に、荒れ地となって

放置されているふるさとの井田川地区でも農業の再興拠点を作ると共に、国の復興交付金などを活用して太陽光発電や風力発電等をすすめています。

新地町の農場 田4ha・畑1ha



新地町の農場の周りは近くにある溜め池の水をみんなで使って畑作中心の農業を行っていた地域だそうで、合同会社みさき未来がここで米を作ろうとしたら、周りの生産者から溜め池の水が枯れてしまうので困るという声が上がったそうです。そこで三浦さんは地下100mまで井戸を掘って、その水を使って農場を始めました。又、ここは風が強いので周囲に暴風ネットを張り巡らせました。

主要作物の米(コガネモチ、天のツブ、コシヒカリ)は飼料米を1/3・食用米を2/3生産。米の生産は農薬と化成肥料を地域基準の半分以下にし、こだわり栽培を行っています。

福島県産の米・野菜・果物等の風評被害対策として、JGAP(農薬や肥料の管理基準を定めて食の安全や環境保全を目指す)の認証取得を目指しています。

又、農産物の放射能汚染に対する検査をお米は全量、野菜は品目ごとに定期検査を行い、その結果をホームページで公開しています。

たまごは鶏を平飼いでびのびとした環境で飼育し、餌は米などを発酵させたこだわりのブレンドをし、おいしく栄養のあるものを食べさせています。

野菜は農薬不使用で、こだわりの有機肥料を使用し、丹精込めて育てています。

年間15~20種類程の野菜を作付けし、新地町の農場ではイチジク、ニラを重点品目としてブランド化を目指しています。

井田川地区の農業再興拠点

井田川地区復活への道として、2017年6月に綿花プロジェクトを立ち上げ活動してきましたが、生産は少量に終わりました。今年は、5月12日に綿花の種まきイベントを計画しています。

生物質、遺伝子組み換え作物など食品に対する安全・安心にこだわり、JGAP（農薬や肥料の管理基準を定めて食の安全や環境保全を目指す）の認証取得を目指し、放射能汚染検査等の情報公開をホームページで積極的に行って、消費者へ安全な商品を届けたいという強い意思を感じました。

訪問で感じたこと

放射性物質、残留農薬、畜産物に蓄積された抗

今回の東北訪問ツアー全体を通して感じたこと

- (1) 事前に外山さん、菊池さんから、訪問先の資料や関係する書物を紹介していただき、事前に目を通すことで訪問ツアーはより充実した内容となりました。
- (2) 「すがとよ酒店」の菅原文子さん
菅原文子さんについては、自著「あなたへの恋文」やNHK放送での出演番組で、こんな方かというイメージはありましたが、実際にお会いして話を伺うと、芯の強さと未来を切り開いていこうとする逞しさを感じました。
- (3) 津波による人的被災は天災ではなく人災
東北地方は、たびたび大津波で多大な犠牲者を出し、その教訓が語られ後世に残されています。しかし、今回の津波の被害者の声を聞くと、津波に対する備えが日常的に十分ではなかったことが語られ、結果として、今回も多大な犠牲者を出してしまいました。
- (4) 原発 20k 圏内の避難指示解除は幻想です
国は「避難指示解除区域は、除染が進んだ！」としています。除染されているのは解除区域の田畑と人家敷地周辺 20メートル範囲内のみです。実際に地面から 1m の高さで放射線量を測って見ましたが、人家の敷地をちょっと外れた草むらではガイドの人が線量計の数値を見て、15 分間で年間被ばく線量をオーバーしてしまうと警告するので、その場を慌てて離れました。これではとてもじゃありませんが、小さな子どもがいる家族は帰還できません。
- (5) 東北取材ツアーの報告会及び、被災地ツアーの紹介
今回の東北取材ツアーの報告を、毎年開催されている学生や市民対象のサマーセミナーで紹介するなどして、東北の現状を一人でも多くの人に伝え、また、被災地ツアーの紹介をして被災地に足を運んでいただく機会を作っていけるようにできればと思います。